

保育ノートの中から

附屬幼稚園 清水光子

お雛祭りの仕度で子ぎもも大人も忙しかつたこの頃は一日一日が格別惜しまれる。大きい組では一そうであるが、やうやく幼稚園の子ぎもになり切つた遊びぶりをするやうになつた小さい組の子ぎも達の姿は何となくたのもしくさへもある。子ぎもの歸つたあさのおへやに一人残つて立つたあのいつもの一種の感慨の中にも春の氣配に似たやうなものを感じられる。が一方こんな事でいゝのだらうかさいふ反省もさにも湧いてくる不安な氣持がかへつて強く、濟まないやうな心持と共に、さつきまでこゝで遊んでゐたあの一人一人についてさまざまの事を思ふのである。そんな思ひの中から二三人についてのこの一年間の追憶をしてみよう。

この組で一番最後まで附添はなれられなかつたのはK夫ちやんで、お母様も協力してするぶん苦心したのであつた。「家を出ます時には御門の所迄さいふ約束でしたのが、御門まで來ますと幼稚園のお玄關迄來て呉れと申しますの

でまゐりましたら又おへや迄も申しまして……」と困つたさいふお顔つきのお母様の袖をK夫ちやんはさうあつても放すものかさいふ様につかまへてゐる。私は幼稚園の生活がこの子に何の魅力もないのぢやないかさいふ寂しい反省と一緒に、このお母様も、約束をして置き乍らするくく子ぎもの我まゝを通してしまはれた事を残念に思つた。それで「では明日からはきつと幼稚園のお玄關でお母様にかへつていたゞいで、又お迎へにいらしていたゞくこにしませうね。」と強く言つて「今日はおまゝごこで魚やさんごつこするのだつたのね」なご言ひ乍らお母様も一しよにおへやの中に入れて。男兒だけれさまごこが大好きで、もう幼稚園生活一ヶ月以上になつてゐるのに一度も男兒と遊んだ事がないK夫ちやんである。それに昂奮し易い性質があるので「明日は少しお泣かせするかも知れませんが」一應お母様の諒解を得て「決して泣き聲が聞えても姿をおみせにならないで」と願つて明日からはさうあつても離すさいふお約束をお母様とした。

今日こそは、翌日は私もはり切つてKちやんを待つた。二三人の子ぎも一しよにお部屋の外まで迎へに出てみるさ、きのふよりしつかりミ袖を握つてお母様の後にかくれるやうにしてゐるKちやん、「おはよう、おまゝごごに入りませうね」、「いや、ワッ」ミ泣き出すKちやんの、固く握つた袖の手を、やつミ放してお母様に目くばせしておへやに引ばつて来る。何事が起つたかさいふやうに泣き出すK夫ちやん。昨日用意した魚屋さんのつゞき、お店の前には釣り堀もある。「まゝごごしてゐたのよ、お買物に行きこころだつたの、さあいきませう」なき言つた所が泣くばかり、私ははげしく泣くK夫ちやんの手をしつかり握つて他の子ぎもを相手にかまはずお客様になりさつきのつゞきを始めた。その間に段々泣き聲が小さくなり、さう／＼まゝごごのごちそうをそつミ食べ始めたKちやん、紙の鯛がお皿にそり返つてゐる。おかしいやうなうれしいやうな笑ひをやつミこころへて私もお皿の鯛をつゝいた。がこれも一時、又思ひ出してワーツミ泣く「カヘル、おかあさん！」折角のおままごごがこわれてしまひさうで外の子ぎも達が可愛さうにもなり私の決心も鈍つたがもう少し思つてゐるさその時外で「パンザーイ」ミいふ叫び聲が聞えた、飛行機だ。Kちやんの手を引いていそいでお庭へ出て仰ぐ五月空の飛行機。おへやのまゝごご遊びは俄然防空

演習ごつこになつてしまつたのだつた。「電氣を消して下さい！」ミいふメガホンが走つて来るさねえやの女兒達がバチバチツミ手つきよく消してまはる。その様子を泣きやんではじめ立つたり坐つたりしてみてるたKちやんはさう／＼私の手を放してメガホンの群について走り出したのである。そして空襲警報がますます／＼ひん發されるささう／＼防護團の一員として活躍し始めたのである。

この日からKちやんはお友達さ遊べるやうになつた。思ひの外事なく、たつた一度ではなれたのであつた。始めは女兒さまゝごごさばかりしてゐたが六月始めから戦争ごつこもするやうになつた。「土俵もつて来ておすもうしていゝ？」ミ今日もきいたKちやん。「きのふ僕動物園へ行つたよ、白熊ちつミも水の中へ入らないのさ」なき動物園の話をするKちやんの觀察力は中々鋭い、さうしてこの頃はこの組の一部をリードしてゐるのである。

○ 「君はそつちへまはれ、僕はこつちからせめるよ、あゝだめ／＼そつミ行かなきや」組の男兒の殆どが一つになつて遊んでゐた今日のカリウドごつこの指揮者だつたT。去年の六月半頃、お腹がいたくてお休みさいふお届けのあつた次の日又風邪氣味でお休みミの届、それから三日程お休みであつた。その頃いつも／＼お池のふちに立つてゐるT

の一人きりの姿が氣になつて、いろ／＼遊に引入れやうと
してゐたので若しやミ疑ひをもつてゐた。五日目の朝「おそ
くなりまして」ミTちゃんの手を引いて入つていらしたお
母様はTちゃんをそれでも黙つて窓の方へ行くのを待つて
「お休みいただきます」ミ挨拶なさる。私は「おまじけいた
ゞきました、若しや幼稚園に行き度くないミ仰言つたの
では」ミきいてみた。「實はそうなのでございます。お腹が
いたいミ申しますので様子をみますよよくいたゞきますし
元氣もよろしくお午頃はもう癒つたミ申します。次の日も
さうなのでちや幼稚園に行けばよかつたのねミ申しまし
たら僕いやなんだよミ申しましてさうしてもまゐりません。

今日はようやく連れて出てまゐりましたが……お仕事な
さいつもしつかり、きちんとするTちゃんの一人で遊ん
でゐる姿を思つてたまらなくいぢらしく濟まなくてならな
かつた。「さうして行くのいやなのミ申しますさだつてつ
まらないんだもの、だれも遊んで呉れないんださいふので
ございます」さいふ事は想像かついた。お友達をつくつて
やらなければ。あんな愉快に遊べるグループの中に、あの
世界に早く入れてやり度い。でお母様をなぐさめて、歸つ
ていたゞいてTちゃんを見るミ、外靴にはきかへてゐる所
だ。「Tちゃん待つてね、先生も外へ行くわ」勢よく外へ
出やうと引返した。新聞紙を持つて戻る爲に。Tちゃ

んはお池が好きだ。紙船をこしらへて浮かせやうと思ひつ
いたのだ。Tちゃんは待つてゐる。私が新聞紙を持つて來
たのをみて「先生何にするの」ミきく。「お舟つくつてお池
に浮かさうと思ふの。競走させませう」Tちゃんはするミ
もしないミいはない、私は櫻の下のベンチでお舟を折つ
た。そして一そうをTちゃんに渡した。Tちゃんは黙つて
うけさつて私の後についてお池へ來る。「さあ競走しませ
う」紙の舟はぬれて、少したつミ沈みさうになるが始め
の押し合でよく走る。Tちゃんは氣がなさうに押す。

そこへSちゃんMちゃん達が「先生僕にも」ミ言つて來た。
私のこゝぞミ「え、こしらへてあげませう、先生のこれで
Tちゃんのミ競走していらつしやいね。」はなれてベンチ
で舟を折り乍らみるミTちゃんはいつの間にかお舟をSち
やんに渡してしまつて立つてゐる。私は駄目だなあと思つ
た。しかし功を急いではいけないミ自分に言ひきかせ乍ら
新しく折つた舟をS、Mちゃんに渡すミTちゃんをさそつ
てお山へ笹舟の笹りにミ出かけた。その道みちに笹の葉
をさり乍らTちゃんのお休みの間中の面白かつた事を話し
てみた。その日の歸りにはTちゃんを帽子をかぶり直し乍
ら「あしたも元氣に、早くいらつしやいね」ミ言つた。それ
から毎日お歸りにはそれを言つた。そしてラヂオ體操の時
の先頭や遊戯の先頭、物まね遊びの先生、ボートレースの

審判官なき何でもさういふことをTちやんにさせた。Tちやん自身へ自信を持たせる爲に他の子ぎもにTちやんをよく知らせる爲に考へたのだ。さうして二週間程の間、さうやら休まずに來るやうになり「おかげ様で元氣にまるる様になりました」とお母様は喜んで言ひに來られたさいふものゝ、今外でジャングルの上で遊んでゐるご思ふごさぐボツンごつまらなさうにおへやへ來てしまふのを度々みてるたから私にはまだ充實して楽しく遊んでゐるごいふ自信はもてなかつた。

所が、いつもそばに腰かけたY子ごは偶然にも姓が同じであつた。それがきっかけで六月の末の或日から急にY子ご仲よしになり、Y子ごいつも遊んでゐる男兒、女兒ごその日からめつきりよく遊ぶやうになつたのである。そうなるごもうすつかりちがつたTちやんになつてしまつた。そうしてそのグループをリードするやうになり、この頃では組全體をリードして遊ぶ、防空演習ごつこなぎの時はTちやんの防護團長の統制の下に一絲みだれず演習する。お部屋でも、外でも、次々に新しい遊びを考へ出してみんなをリードして遊ぶ。體は小さいけれど溢れたTちやんが大きい組になつて一そう落付いて積極的に、充實した生活をして呉れるやうに祈つてゐる。

○

今はTちやんご名コンビでちやうご相談相手ごいふ様に仲のよいNちやんは本當に口をきかない子ぎもであつた。お仕事に表れる熱心さご獨創的な完全さはこの子の底力があるごさがよく判るのであるが、入園してから十月の頃まで「先生」ご言つて話しかける事は一度もなく、お友達ごなら少しは話しらしくしてゐるものゝ、こちらで話しかけてもまるで興味の無いものゝやうに「うん」ごか「うん」ごかいふ返事はかりでざりつく島もない有様である。それに何ごなく感がぐらくて潑刺したごころがない。男兒ご遊ぶのではあるが明るくかけまはる事がなく、いつもお池のふちごか山の上ごか木の蔭ごかで遊んでゐた。又私には何だかこの子ぎもには寂しく感じられる性質があるやうに思はれた。外で遊んでゐて、みんなの欲しい、鐵砲に手頃な棒を見つけるご何本でも自分のものにし、一番勢力のある、乃至は仲よしの友達以外には決して借さない。歸る時は誰にも判らないやうな隅にかくして置く。銘々筆筒の引出しには或時白墨が澤山入つてゐた。誰もが欲しくて先生にねだつたものであつた。まだ入園間もない頃はラヂオ體操の時になるごいつもジャングルジムの一番上に陣取つて何ご言つても下りずに終るまで見てゐた事がつゞいてゐた。これ等のごさはこの時代にある本能の表れであるごいへばそれだけであるけれど他の子ぎもご相容れない野性的

なものを多分にもつてゐるNちやんがこのまゝでは可愛さうでならなかつた。まづ明るく話をする事が出来るやうにし度いご家庭にも話し、出来るだけ話しかけるやうにした。お辨當の時も許される限りは隣に坐ることにした。お辨當も、ふたを立ててかんで食べてゐたNちやんのそれを、「みんな姿勢よくふたをきちんきあけていたよきませうね。」と度々言つて自然にそれをやめるやうにさせたりしたが、斯うしたNちやんの態度の原因をさがしてそれから考へねばさういらくたづねてみたがさうも判らなかつた。三人姉弟の、恵まれた、よく手の届く、そうかさいつて届きすぎもせぬ家庭の坊つちやんである。「持つて生れた」根強い性質がいくらかでも方向をかへて欲しいと消極的ではあるけれど、さう考へたのである。明期にお話の出来る子ぎもに、さ第一にそこへ目あてを置いて、九月からのいつもの席をTちやんの隣にした。お仕事のグループでこの席はいつもきまつたさいふものではないが、一番多く腰かける席なので、Tちやんの快活さで合理的な所がNちやんに少しでも接して欲しいと願つたのだ。はじめは別段仲よしにもならなかつたこの二人は十一月の頃から段々に一しよにいつも遊ぶやうになつて来た。全くこちらの思ふ壺であつたがさうなつてからNちやんの日常は目立つて變つて来た。TちやんとNちやんがせつせき椅子を集めて

汽車でつこの仕度をしてゐる、「いれてー」さいつて来る。「OさんはいいけきMちやんはいけくない」さいふやうに前には人ざらひをしたNちやんも、「いよ、君はお客になるかい」さいふTちやんにならつて誰でも一しよに遊ぶやうになつた。お辨當の時「今日のおかづなんだかあてつこー」さしきり賑やかな時も、それまでは黙つてふたをおさへてゐたNちやんも、此頃では「僕のはなーんだ」さいふやうになり、隣に坐つた私のが偶然同じであつたりする「僕」は先生さおんなじだよ」嬉しさうに皆に言ふやうになつた。そんな時本當にほつとした氣持になつてNちやんみずにもられない。斯うしてだんくほごれて明るくなつてゆくのは全くうれしいものであつた。もう一息である。「僕」のふ〇〇へ行つたの「さいふ友達の話に」あ、そんな所しつて「さいはずに聞けるやうに、愉快なグループの仲に快活にこちらからさび込んで行けるやうに。大きい組のこれは私に與へられた宿題の一つである。